# 春

竹久夢二

青空文庫

時　ある春の晴れた朝
所　花咲ける丘
人物
少年　（十三歳位）
少女　（十一二歳）
先生　（小学教師）
猟人　（若き遊猟家）
兎　（十二三歳少女扮装）

舞台は、桜の花など咲いた野外が好ましいが、室内で装置する場合には、緑色の布を額縁として画り、地は、春の土を思わせるような、黄土色の布か、緋毛氈を敷きつめる。背景は、神経質な電気の反射を避けるため、空も山も花も草も、それぞれの色の布を貼りつけたものを用う。すべて舞台の装置も、演出も、神経的でなく、子供の本能と情操とが想像した、愛らしい朗かな春そのものの創造であること。

扮装は、少年少女は平常着のままでも好い、その他は子供の空想の産物で好いが、先生は威厳を損じない程度にのどかな人物であること、猟人はずんぐりしていて意気なあわてもの、兎はフランネルのマスクを被る。

## 第一景

幕があくと、舞台裏から左(さ)の唱歌が、だんだん近づき、舞台下手から少年少女が歌いながら登場。

さくら　さくら
やよいの　そらは
みわたす　かぎり
かすみか　くもか

少年少女が登場すると、舞台裏でもその唱歌を少し遅らせて、山彦(やまびこ)の心持で歌う。

少女「おや！　兄さん、誰(だれ)か山の向うでも歌っていてよ」
少年「うそだよ、きっと夏(なつ)ちゃんの空耳だろう」
　少年歌いつづける。少女耳をすます。
においぞ　いずる
いざや　いざや
みに　ゆかん
少女「いいえ兄さん、よく聞いて御覧なさい……ほらね」

少年「ああ、ほんとだ、誰だろう」
少女「ね、兄さんもっと何か言って御覧なさい」
　さくら　さくら
　やよいの　そらは
　少年歌いながら首を傾、舞台裏でも歌を真似る。
少年「誰だ！」
山彦「誰だ！」
　少女おどおどと少年に寄添う。
少年「真似をするのは誰だい」
山彦「真似をするのは誰だい」
少女「兄さん、あたし怖くなったわ」
少年「怖かあないよ。誰かきっと悪戯をしているんだ」
　少年勇敢に力みながら
少年「人の真似をするのは失敬だぞ！」
山彦「人の真似をするのは失敬だぞ！」
少女「大丈夫兄さん？」
少年「大丈夫だよ」山に向い「馬鹿野郎」

山彦「馬鹿野郎」
少女「兄さん。向うの人きっと怒ったのよ」
少年「そうかなあ」
　少年も怖気づき、妹をかばう。
　上手より吉野先生登場。
少女「あら先生よ」
少年「あ、吉野先生、こんちは」
先生「今日は」
少年「先生、先生は先刻、山の方で唱歌をお歌いになりましたか」
先生「いや、歌いませんぞ」
少年「でも、先生、ぼくたちが唱歌を歌っていたら向うの山でも唱歌を歌いましたよ」
先生「なるほど」
少女「それからねえ先生、あんまり真似をするからお兄さんが誰だって仰言ると、向うでも誰だって言いましてよ」
先生「なるほどね」
少年「あれは山の婆が歌ったんですか」
先生「ははは、それはね山のお婆さんでも神様でもない。山彦というものじゃ」

少年「山彦がものを言うんですか」
先生「そうじゃ、こちらの声が向うの山へ響くと、向うの山がそれを返してくるのじゃ、だからこちらの言う通りに向うでも答えるのだ」
少年「だから僕が馬鹿野郎って言ったら向うでも馬鹿野郎って言いましたよ」
先生「そうだろう。だからこちらで何かやさしい事を言ってやれば、向うでもやさしい事を返してくるのじゃ」
少年「おもしろいなあ」
少女「兄さん、何かやさしい事を言って御覧なさい」
少年（山に向い）「こんちは、ごきげんはいかがですか」
山彦「こんちは、ごきげんはいかがですか」
　少年少女顔を見合せて笑う。
少年少女「あなたは好い方ですね」
山彦「あなたは好い方ですね」
先生「どうだね、山彦は正直だろう。どれ私は行こう、仲よく遊んでおいで」
少年「先生、さよなら」
少年少女「さようなら」
　先生下手へ去る。

## 第二景

舞台は前景のまま、少年は木の枝など振りて歩きまわる。
少女摘草などする。
この時舞台裏から左(さ)の歌が聞える。
　ころ　ころ　小山の　小兎(こうさぎ)は
なぜに　ころ　ころ　お泣きだえ
お母さんがないか
実がないか
お母さんは　そばに　いなさるし
木の実は　お山に　あるけれど
九十九人の猟人(かりうど)が
九十九谷をとりまいて
母子(おやこ)もろとも打つわいな。
少年「山彦(やまびこ)がまた歌い出したよ」
少女「そうね」（耳をすます）

歌が終ると、下手から一匹の兎が呼吸(いき)をきらしながら走って出る。

兎「助けて下さい。怖い猟人がわたしを撃ちにくるんです」

少年「その猟人はどこにいるの」

兎「あれあの坂をいま上ってます。もうじきここへ来るでしょう。どうぞわたしを助けて下さい。」

少女「まあ、可哀(かあい)そうね。兄さんどうしたら好(い)いでしょう」

少年「よし、きっとぼくが助けてあげるよ」

兎「ほんとに、坊ちゃんありがとう」

猟人撃方の構えに銃を持って、下手より急ぎ登場。

少女「あら兄さん」

少年「あ、来たな」鋭く少女に「はやく、かくして、かくして」

猟人「坊ちゃん、兎(うさぎ)を知りませんか」

少年「なんですか」

猟人「兎を知りませんか」

少年「知っていますよ、おじさん」

この対話の間に、少女は兎をほどよき叢(くさむら)にかくす。

猟人「たしかこの辺へ逃込んだがなあ」（独語(ひとりごと)をしながら四辺(あたり)を見廻(みまわ)す）

少年（猟人の注意を自分の方へ向けるようにあせりながら）「おじさん兎の毛は白いんでしょう」

猟人「ああ、その白兎、白兎」

少年「耳が長いでしょう、おじさん」

猟人「そうそう耳が長いね」

　猟人、銃を杖にして話し出す。

少年「ね、おじさん、兎の尻尾は短いでしょう」

猟人「短いとも、これんばかりさ」

少年「それから、前脚が短くて、後脚が長いでしょう」

猟人「短くって、長くって」猟人は、自分が何をしているかを思出して、「坊ちゃん、ぼくはその兎を探しているのだよ」

少年「おじさん、その兎はやっぱり赤い眼を持っているでしょう」

猟人「ぼくは、坊ちゃんの博物の復習をしているんじゃないよ。一体その兎は……」

少年「白兎ですね。おじさん」

猟人「白兎ですよ。何遍それを言えば好いんだ。そんなこと言っているうちに、気の利いた兎は、穴の中へもぐって昼寝をするだろう」独語のように「この子は、よっぽど呑込のわるい子だな」

少年「なあんだ、おじさんは、その白兎を撃ちにきたの」
猟人「そうさ」
少年「だっておじさんは、いきなり兎を知らないかって言うんだもの、だからぼく、学校の復習をしちゃったのさ」
猟人「眼をぱちくりやっている」
少年「ああ、その兎なの」
猟人「そうさ」
少年「その兎なら、もうよっぽど遠くへ逃げました。あの道の先の、ほら左側に赤松があるでしょう」
猟人「あるある」
　少女は猟人の方を見て笑っている。兎も出て来て見ている。
少年「あすこを左へ曲って、桜の木が見えるでしょう」
猟人「ああ、見えるね」
少年「あの木から、一本、二本、三本、四本、五本、六本、十三本目の桜の下へかくれましたよ」
猟人「いや、どうもありがとう」
　猟人はあたふたと、上手へ走ってゆく。

少年「おじさん、早く走らないと、また兎が逃げますよ」

　少年兎に近づきながら、「万歳、万歳。兎さんもう出ても好いよ」

少女「ずいぶん心配したわ」

兎「やれやれ、ほんとに危い所を助かりました。どうもありがとうございます。」

少女「よかったわね」

少年「うまくいったね」

　少年を上手に、兎をまん中に、三人手をつなぎ舞台の前へ進み。

兎の挨拶

　御見物のお嬢様坊ちゃまがた、わたしはまあ何と言って皆様にお礼を申して好いやら、あんまり嬉しくて、申上げる言葉も知りません。

　これはみんな、この賢いお坊ちゃまの勇気と、親切なお嬢さまのお蔭です。けれどあの草むらの蔭にかくれている時、皆様はほんとうにうまくわたしをかばって下さいました。もしも皆様のうちの誰かが「兎はあそこにかくれているよ」とでも仰言ろうものなら、わたしはまあどうなっていたのでしょう。お蔭様でわたしはこれから懐しい親や兄たちの許へ帰ってまいります。皆様もどうか御機嫌よろしく、ではさようなら。

かすみか　くもか
はたゆきか……舞台裏の賑(にぎ)やかな合唱だんだん細りゆきながら

（幕）

# 青空文庫情報

底本：「童話集　春」小学館文庫、小学館
　　2004（平成16）年8月1日初版第1刷発行
底本の親本：「童話　春」研究社
　　1926（大正15）年12月
※「少年（猟人《かりうど》の注意を～白いんでしょう」は、底本では二行目は3字下げ、三行目は1字下げになっています。
入力：noir
校正：noriko saito
2006年7月2日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 春

竹久夢二

2026年10月1日　第二版

## 奥　付

発行　　青空文庫

URL　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　https://aohelp.club/
BiliBili　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/